

考えよう北方領土

魚津市立西部中学校 二年 廣瀬寧々伽

択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々から成る北方領土。日本が抱える問題の一つに北方領土の返還問題があります。私はこれまで、テレビや新聞で北方領土の返還問題について耳にしたことはありましたが、あまり関心がありませんでした。自分には関わりがなく遠い場所の話だと思い、詳しく知ろうともしませんでした。

でも、私が住んでいる富山県は、北方領土からの引揚者が全国二位。しかも、九割以上がお隣の黒部市と入善町だと知り、とても驚きました。また調べてみると、最も近い歯舞群島の貝殻島までは、北海道本島からわずか三・七キロメートルしか離れていないそうです。三・七キロメートルと言えば、車でたった五分程の距離です。そのことを知り、私と北方領土の距離がぐんと近くなりました。

北方領土の島の中に「越中村」と呼ばれる村があり、島には二つの学校があったこと。昆布漁が盛んだったこと。

昆布漁の仕事は厳しく、朝早くから夜遅くまで働いたこと。島には医者や病院も少なく、交通も不便で困難な事が多い中でも、将来に希望をもって苦しい事に負けないで一生懸命努力し続けたこと。特に「富山県の出稼ぎ漁民は真面目によく働く。」と歓迎されていた事を知り、私は何だか嬉しくなりました。かつて日本の人々が苦勞して開拓をしてきた北方領土を返還してもらう為に、私達はどうか、良いのでしょうか。

先日、新聞で黒部市の北方領土出身の方が、学校を訪問して自分の体験を語り継ぐ活動をしておられる記事を読みました。引揚者の方々は、高齢化で次世代へ語り継ぐ人がいなくなる事を心配されていました。私達は、北方領土の歴史や人々の思いをもっと学び、北方領土が日本の領土であることを忘れないように伝えていかなければならないと思います。

また、日本とロシアの間に友好的な関係を築く事も大切です。現在、北方領土にはロシアの人々が生活しています。その人々を追い出す事があってはなりません。日本がソ連に追い出された時と同じ事をしてしまうからです。両国が共在して北方領土に住み、お互いの文化の良い所を取り入れて新しい北方領土をつくりあげることができないの

でしょうか。

皆、北方領土についてあまり知りません。知らないのは私も同じです。それでも平和で美しい日本の領土をどのように守り、次の世代にどのように伝えていくのか、また、そのために私達にできる事は何かを考えるのは、大切な事です。返還が実現するには時間がかかると思いますが、両国がお互いの立場を理解し、新しい形の北方領土が生まれると素晴らしいなあと 생각합니다。

北方領土問題対策協会理事長賞

北方領土問題について

黒部市立高志野中学校 三年 朝日 千尋

もし、あなたの家に知らない外国人がいきなり入り込んできたらどうしますか。知らない言語で怒鳴られ、部屋をぐちゃぐちゃにされ、家も故郷も奪われ、あなたは足を踏み入れることさえできなくなるのです。私だったら絶対に耐えることができないでしょう。しかし、実際にこの日本

でそういう問題が起きているのです。それは、「北方領土問題」です。

私は夏休みに北方領土の現地視察に参加しました。そこで私は、元島民の講演を聞いて、いかに元島民の方々が自分の故郷を愛し、帰りたいと願っているのかを感じる事ができました。自分は北方領土とのかかわりが深い県に住んでいるので、この問題についてある程度の知識や関心がありました。しかし、講演を聞いて思ったのは、他の県はどうなのかということです。北方領土問題とは、元島民の方々だけの問題ではなく、日本全体の問題なのです。私は現地視察のおかげで北方領土について深く知ることができ、また、四島の美しさや魅力を感じる事ができました。だから、もっとこのような活動を増やして、未来を担う人々にこの問題について知ってもらいたいと思っています。

私が現地視察で一番印象に残っているのは元島民の方の話です。内容は、数年前に北方領土で旧爆弾の処理が行われて、北海道にも音や振動が伝わってきたというものでした。私は現地視察で四島の映像を見て、とても自然が豊かで美しく、本当に良い島だと思っていました。しかし、この話を聞いて、こんなにも美しい島なんてことをするの

だろうと思いました。このまま四島の返還がのびていくと
かつて元島民が暮らしていた美しい島の姿はなくなつてし
まいます。また、長い間ロシアの人が島で暮らしたため、
四島がロシア化してしまっています。それを少しでも早く
くい止めるために一日でも早く返還が実現して欲しいと
思っています。

また、私が少し疑問に感じているのは、今年で北方領土
問題は戦争と同じく七十年経つのに、全然報道されていな
いということです。戦争の問題と同じくらい深刻な問題な
のにと思います。私は北方領土問題解決への一歩はまず
「知る」ことが大切だと思えます。私は視察で島が目の前
に見えたとき、こんなに近くにあるのに行けないという見
えない壁を感じました。私はまだ子供ですが、その壁を無
くし、問題が解決するまで伝えていきたいと思えます。元
島民ではなく「島民」と呼ばれるようになる日まで。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

北方領土返還について

魚津市立東部中学校 三年 清河 慶美

「戦争で故郷が奪われた」そんな見出しが私の目にとび
こんできました。

私は、この記事と出会うまで、北方領土について、理解
していませんでした。というより、あまり興味がなく、自
分から知ろうとしてもいませんでした。しかし今は、北方
領土問題について知っていくうちに、とても大事な問題だ
と思うようになりました。

私は今年の八月十九日、北日本新聞をめざらしく読もう
となぜか思い、パラパラめくっていました。その中に、北
方領土について書かれている記事を見つけました。

私は、この記事を読んで、驚いたことがあります。そ
れは「玉音放送の後も戦いは続いていた」ということで
す。一九四五年八月十八日にソ連軍が千島列島への攻撃を
始め、北方領土に住む島民たちは、かけがえのない故郷を
失ったのです。戦争が終わったと思っていたのに、ソ連軍

に占領され、大切な故郷をうばわれる。想像しただけでも、つらいことなのに、そこで生きた人たちは、もっともつとつらかったと思います。

あれから七十年。未だに、大切な故郷、北方領土は返還されていません。

では、どうしたらよいのか。まず、日本が一方的に返還を要求してもだめだということです。今、北方領土には当時のことを知らないロシア人がたくさん住んでいるそうです。強制的に日本の領土にしてしまうと、その人たちが困ってしまいます。だからといって、この問題を放っておくわけにはいきません。日本にも早く故郷へ帰りたい方、帰れず無念のまま亡くなられた方もいるでしょう。だから、ロシアも日本もお互いが納得のいくようにしなければならぬのです。そのためにも、一人一人が北方領土問題についてしっかりと認識していくことが必要だと考えました。そして、お互いを正しく理解していくことが大切だと思います。以前の私のように、北方領土問題について、関心もなく、理解をしていない人たちがたくさんいると思います。みなさんが問題に向き合い、声を上げ、そして国が動き出す。そうすれば、この問題は良い方向へと前進するのではないのでしょうか。

北方領土問題は、とても難しく、解決するのは大変で、時間がかかると思います。だけど、これは、同じ日本人の、特に富山の人にとっても深いつながりをもつ問題です。人ごとではないのです。これから、この問題を動かすのは、私たち全国民の小さな声です。

私は、まだ北方領土について知らないことがたくさんあります。これからは、関心を持ち、この問題についてのニュースに耳を傾け、理解を深めていきたいと考えています。それが私にできることです。

——いつか、「故郷返還」そんな記事が載っていることを願って……。

富山県教育委員会教育長賞

北方領土への想い

黒部市立鷹施中学校 三年 小室 春佳

北方領土、それは私たち富山県民の先人も開拓に協力した大切な財産であり、本県にもたくさんおられる元島民の

方々にとってはかけがえのない故郷です。しかし、戦後七十年が経過した今も、依然としてロシアによる不法占拠が続けられています。

私は学校の総合的な学習の時間に、元島民の方の話を聞く機会がありました。それまで北方領土について関心がなかったのですが、元島民の方の話を聞いて、想像以上に大きな問題であると知りました。私の北方領土返還への考えは二つあります。

一つ目は、日本とロシアが互いに考えをもち、理解し合っていくことです。私は初め、「悪いのはロシアだ。」と決めつけていた部分がありました。確かに、「日ソ中立条約」を一方的に破棄し、北方領土に攻めこんできたのはロシアです。しかし、ロシアが攻めこんでくる発端として、日本の中国や韓国への理不尽な支配があげられると思います。だから、ロシアだけが悪いわけではないのです。日本の意見ばかり押し通すのではなく、ロシア側の意見にも耳を傾けなければいけません。そして互いの意見や考えを思いやりの心で理解していけばいいと思います。

二つ目は、私たち若者が北方領土返還についてもっとよく知り、考え、伝えていくことです。かつて北方領土で生活し、北方領土を故郷とされる方々の平均年齢は八十歳と

高齢化が進んでいます。また、領土がなかなか返ってこないことが多くの若者の無関心さへつなげています。このままでは、北方領土返還は遠い存在となってしまうと思います。だからこそ、私たち若者が北方領土をもっとよく知り、深く考え、そして強く訴えていくべきです。

私は、「北方領土講習会」が終わり、集配物を取りに行き、教室に帰ろうとしたとき、一人の元島民の方にこんなことを言われました。「あなた方が、ロシアと日本の架け橋である。」と。心の底から強く訴えているようなあの目は今でも忘れません。その時から私は、「私ができることをしたい。」と本気で思うようになりました。

今の私ができること。それは、北方領土の事を学んだ一員として、情報発信者となり、一人でも多くの人に島に対する関心をもってもらうことです。そして、その人々と一緒に日本とロシアを結ぶ「架け橋」になりたいです。きっと、「北方領土問題」が解決する日は来るでしょう。その日が一日でも早く来るように、私も強く訴え続けます。「誰もが平和」の希望を胸に。

互いのふるさと「北方領土」

黒部市立宇奈月中学校 三年 中谷こと葉

「どうしても島を返して欲しい。」この言葉が今も私の心の中に残っています。先日、北方領土学習の一環として、私の学校では出前講座が行われました。出前講座が行われる前は、授業で話を聞いたり、写真や映像などを見たりして、北方領土の学習をしました。しかし、実際の元島民の方々の肉声は、写真や映像などの資料とは比べものになりませんでした。やはり、元島民の方々の話からは「一刻も早く返して欲しい」という気持ちと同時に、ふるさとである北方領土への「愛」を感じました。

私はここで三つのことに触れ、北方領土問題について考えたいと思います。

一つ目は、北方領土の歴史についてです。条約などから見ても、北方領土は日本固有の領土であり、一度もロシアのものになっていませんが、ロシアが戦後、不法占拠しています。そのため、今も北方領土へ自由に行くことができ

ません。日本の領土なのに…。

明治時代から北方領土で生活したり、漁業をしたりする人がたくさんいました。特に富山県の人には出稼ぎとして北方領土へ行く人が全国の中でも多かったのです。だから、北方領土問題は私たちとてもつながりの深い問題です。

二つ目は北方領土の現状についてです。現在、北方領土には学校や商店があり、戦後七十年間、ロシア人の方々はそこで生活を営んでいます。つまり、北方領土が元島民のふるさとであると同様に、そこで生活を営んでいるロシア人の方々にとってもふるさととなっているという現実があります。戦後、日本は七十年の時が経ちましたが、そこに住んでいるロシア人の方々も同じ七十年を過ごしています。

今も返還交渉が進められていますが、ロシア側と日本側に意見の大きな食い違いがあり、話が前に進んでいないのが現状です。

三つ目は元島民の方々を中心とした返還運動です。署名運動などで全国に呼びかけているそうです。「言い続けなければ消滅してしまう。」という言葉が、とても重く感じられました。確かに「言い続ける」や「訴え続ける」ということは、とても大切であると思います。

これらの三つのことを踏まえて、この北方領土問題の解決策は「共存」にあると私は思います。しかし「共存」と言っても大まかですので、共存できる方法をみんなで模索し続けることが私たちにできることであり、問題解決する道であると思います。

もしも、日本に返還されることになったら、今住んでいるロシア人の方々はどうするのでしょうか。そう思ったとき、「共存」という方法が良いのではないかと思います。同じ過ちを相手に繰り返してはいけません。ふるさとから追いやられるつらさや悲しみ、恐怖は追われた方が一番理解しておられることです。だからこそ、共存することで、互いのふるさとを愛し合えるのではないのでしょうか。一日も早く、この北方領土問題が解決されることを願っています。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

大切なのは思いやり

射水市立小杉南中学校 三年 助田健太郎

「北方領土の問題」それは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々が日本固有の領土でありながら、ロシアが占拠していることです。日本が北方の島々のことを知ったのは、十七世紀の初め頃です。これは、松前藩の記録にも残されており、ロシアよりも早くから、北方四島は日本の領土だったのです。そして、一八五五年「日魯通好条約」が結ばれ、北方四島は日本の領土であることがロシアとの間で法的に確定されました。

ところが、第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、当時日本とソ連が結んでいた「日ソ中立条約」をソ連が一方的に破棄し、対日参戦をしました。ソ連軍は、終戦後北方の島々への攻撃を開始し、北方四島の全てを占領してきました。そして、七十年の間、ロシアの占領は続いています。

僕は、この七十年間という年月に目をむけてみました。

北方領土から富山県へ引き揚げた方は、約千四百人でしたが、現在では約五百人と減り、その全員が高齢者です。つまり、当時の北方領土での暮らしかや北方領土の風景を自分の目で見て、肌で体感した人々が少なくなっているのです。今日まで、北方領土の返還を求めて立ち上がった魂が失われつつあるのです。だから、僕達がその魂を受け継いでいかねばなりません。

「北方領土の問題」それを解決するためには、政府やおじいちゃん、おばあちゃんだけでなく、僕達若い世代の力が必要なのです。

ところで、七十年間という年月からは別の考えも生まれてきます。北方領土をロシアが占拠してから七十年、ここでいきなり日本に返還されるとなるとロシアの人々が困ります。長年住み慣れた土地を離れることになるからです。七十年前、つらく悲しい思いをしたあの記憶をもうよみがえらせてはなりません。そこで例えば、一度に四島全ての返還を要求しないことや、返還後も北方領土周辺の海は日本とロシアが共有することなどロシアへの配慮が必要だと思います。また、ロシア政府や北方領土に住んでいるロシアの人々との話し合いで互いに理解を深めることも重要だと思います。

「北方領土の問題」それを解決するためには、ロシアへの思いやりが一番大切なのです。

「北方領土の問題」それを解決するために僕達には何ができるでしょう。僕達は、まだ子どもなので、直接ロシアに返還を要求することはできません。しかし、それを意識することならできます。一人一人が意識すれば、国の原動力となり、解決が近づくと思うのです。

だから僕は、北方領土のことを見て、聞いて、学んで、意識して国を動かす原動力になりたいです。

入 選

「共存」できる領土に

入善町立入善西中学校 二年 石原 千鈴

「北方領土」この言葉は、ニュースや新聞でよく耳にします。領土問題について難しい言葉を並べ、説明してあるのがほとんどだと思います。でも、それについて考えたことは全くありませんでした。考えようともしていません

した。一週間程前までは。

先日、以前北方領土に住んでおられた方々が中学校に來られ、たくさん話を聞かせていただきました。そこでは、当時の島の様子や生活、ロシアとの問題など、詳しく話してくださり、どれも勉強になることばかりでした。何も知らない私にとって、島での話は深く考えさせられる興味深いものでした。その中で、特に印象に残ったのが、島での生活、ロシアとの問題、そして、問題解決へ向けての話です。

島での生活は、主に小規模な漁場を営んでいたそうです。その中でもコンブ漁は、厳しいものでした。子供達も手伝い、朝早くから働いていました。しかし、最盛期にはたくさんコンブが採れたそうです。だから、どんなに過酷な環境でも、この水産資源の豊かな土地に住み続けたのだと思います。北方領土で、コンブや魚をとることのできる日が一日も早く来ることを願います。

領土問題では、元々は日本の領土であったものを、第二次世界大戦後、ソ連軍が占領したと話しておられました。なぜ占領したのか疑問に思います。それは、やはり魚貝類が多くとれることが理由の一つなのではないかと私は思います。

問題解決へ向けては、外交交渉が粘り強く続けられています。

ますが、国を動かすのは国民です。そう、私たちも、動かなければなりません。確かに、私たちにできることは限られています。でも、返還運動に取り組み、もしくは、それが無理でもまず北方領土について知ること、少なくとも問題解決への第一歩なのではないでしょうか。私はもう一つ解決策を考えました。それは「共存」です。ロシアも日本も、北方領土を愛する気持ちは変わりません。ですから、互いの国を理解し、信頼し合えば「共存」できるはずです。そうすれば、メリットも多くあると思います。今現在北方領土に住んでいるロシアの人々、今日日本にいる元島民の人々にとっても、水産資源の面についても都合が良いのではないかと思います。

お互いを尊重し合い「共存」できる領土になることを強く願って。

わたしたちにできること

黒部市立鷹施中学校 三年 上松 美稀

「北方領土ってどんな島？」「どうしてロシアに占拠されるの？」と質問されたとき、みなさんはしっかり答えることができずか。北方領土学習をする前の私は、きっと答えることができませんでした。私にとって北方領土とは、日本固有の地でロシアに対し、返還運動を行っていることくらいしか知らず自分にはあまり関係のない話だと思っていました。でも、北方領土学習で元島民の方や地元高校生の話を聞いて、私の考えは変わりました。そして、今自分が北方領土返還のためにやるべきことを考えてみました。

北方領土とは、一六三五年に日本が蝦夷地として発見した土地です。これはロシアより先に日本が調査を行っていたため、発見当初から日本固有の土地であることがわかります。その後、三つの条約が結ばれますが、すべての条約において北方領土は日本の領土と定められています。しか

し終戦後、ロシアの攻撃が始まり、一九四五年九月五日から今もまだロシアの不法占拠が続いています。北方領土は自然豊かで世界三大漁場の一つでもあり、元島民の方は毎日自給自足で生活しておられたそうです。また元島民の方にとっては、幼い頃の思い出がまった大切な故郷でもあります。それなのにロシアに占拠されてからは自由に四島に行くこともできず、北方領土訪問に行くと、自分達の故郷に帰ってきたのにロシアに検問されたそうです。また今の北方領土は豊かな自然に悪影響なことがたくさんされていて、ロシアの人々の環境への意識の低さを感じたそうです。

私は元島民の方のように故郷を奪われた経験はないし、もちろんこれからもそのようなことは起こらないと思ってきました。だけどこの現状に対する元島民の方の思いを私は話を聞く中で感じることができました。故郷に戻れなく、豊かな自然が壊されていく悲しさがひしひしと伝わってきました。私はこのような元島民の方の思いをもっと若い世代が知る必要があると思います。高校生は話の中で若い世代の関心がなくなっていると言っていました。でも今後日本の代表として返還運動を行っていくのは私たち若い世代です。だからもっと関心をもつことが大事だと思います

す。そして若い世代が関心をもつことは日本だけでなくロシアにとつても必要なことではないでしょうか。今ロシアの人々が北方領土のことをどれだけ知っているかわかりません。だけど日本とロシアが北方領土について同じ知識をもつことは、北方領土返還への大きな一歩だと思います。まだはつきりと同じ知識をもつためにすることは思いついてないけど、いつか必ず実現させたいです。そして何年かかって北方領土が日本に返還されるよう、自分にできることをしっかりと、返還に貢献したいです。

入 選

現地視察で学んだこと

黒部市立高志野中学校 三年 濱松 英寿

僕は夏休みに北方領土現地視察支援事業に参加しました。この事業に参加しようと思った理由は、祖母が北方領土の元島民だからです。僕はこの事業を通して、なぜロシアと話し合う機会がたくさんあったのに、北方四島の返還

が進んでいないのかを学んでこようと思いました。

僕は、この問題が続いている理由は二つあると思います。一つ目は、「北方領土なんてどうでもいい」と思っている人がいるということです。また、聞いた講話の中で「別に四島全て還ってこなくてもいいじゃないか」と言っていた人もいます。このように、北方領土に関していいかげんな考えをしている人はたくさんいます。しかし、北方領土は歴史的に見ても日本固有の領土に間違いなく、七十年経ったとしても、全ての島の返還が必要で妥協することはあってはいけないものだと思います。

二つ目は、返還運動そのものの勢いが衰えてきていることです。返還運動の始まりは、終戦直後の根室の市長がアメリカと日本にソ連のかわりにアメリカが北方領土を占領してくれと陳情したのが始まりだと教えてもらいました。まだ、北方領土の元島民の方が返還運動をしていた時は、北方領土という故郷を還してほしいという思いが一番強かったと思います。しかし、この運動も今では衰えてしまいました。そのことがよく分かるのは北方領土返還運動のキャラバン隊です。僕たちは、富山に帰ってきてから返還運動の富山県大会に出席しました。その時にスピーチをしてくれた人たちがキャラバン隊です。でも、そのスピーチ

の中で出てきた写真では若い人が大勢参加していたのに対し、今回の大会では第三世代が一人で、残りは全員第二世代でした。返還運動は若い世代がどのように行動するかにかかっています。だから、大人になっても返還運動に参加したいです。

北方領土問題はこのままだとさらに悪化します。僕はこの事業を通して自分の出来ることを見つけました。それは、元島民の方の声や現地の声を伝えていくことです。元島民の方の平均年齢は八十歳を過ぎています。学んできたことを後世に伝えることが出来るように努力したいです。

入 選

北方領土はふるさと

黒部市立宇奈月中学校 三年 山口真由香

北方領土は、私たちが住んでいる富山県と関係の深い場所です。江戸時代から北前船や明治時代からは昆布漁への出稼ぎなど、歴史の中でのつながりも長い場所です。その

北方領土は、現在ロシアが戦後から不法に占拠をしています。なぜ不法になるかというと、ロシアと日本の間には条約があり、その中で北方領土は日本固有の島とされているにもかかわらず、ロシアが侵攻してきたためです。ロシアに対して、北方領土は日本の領土であるという主張を日本は続けてきました。しかし、北方領土は今もロシア人が生活を営み、日本人は北方領土へ自由に行くことができないという状況を変えられずにいます。北方領土が日本の領土であった時間は、止まってしまったのです。

実際に島に住んでいた方々は、どんな生活を送っていられたのでしょうか。北方領土に移住するきっかけとなったのは、昆布漁です。昆布の漁場で働く人は多かったです。子どもから大人まで家族一丸となって昆布を収穫し、生計を立てていたといえます。今の私たちの暮らしはとても豊かなものです。しかし、当時北方領土で生きた人々は、生きることに変な苦勞をされてきました。私たちと同じ子どもでも、学校に行くことが楽しみだったそうです。その分、島への思い、島での家族との思い出は、強くたくさんあったのだと思います。やはり島に戻りたいかと聞かれると、戻りたいと答える元島民の方はたくさんおられました。しかし、その想いはあるけれど、元島民の方

は歳もあり、戻れないだろうという方もおられます。北方領土問題が解決されず、長く状況が変わらないまま月日が経ってしまったからです。

私は、一人の元島民の方の言葉で、印象に残っていることがあります。それは、「北方領土は私たちのふるさとであり、あなた方の住んでいるこの場所と同じように。」という言葉です。北方領土は日本の領土であると同時に、元島民のみなさんのふるさとなのである、そのふるさとへ自由に帰ることすらできないのはおかしい、と感じました。もちろん戦後北方領土で生活してきたロシア人にとってもふるさとです。互いに歩み寄ることができれば、日本にとってもロシアにとってもこの先ふるさととして、その地へ行くことができるはずです。国と国で解決するには政府が話し合いを進める必要があります。私はこのことをより多くの人に知ってもらいたいです。多くの人が国に働きかければ、日本全体としての想いが、返還や歩み寄りにつながると思うからです。ずっと進まないまま来たこの日から、日本とロシアの良好的な関係をつくる未来につなげるため、私たちは、これからも北方領土について学び、知識を増やしていく必要があると強く感じます。北方領土を思う気持ちをもち続けたいです。

入 選

私たちの第一歩

魚津市立東部中学校 三年 清野 真結

「北方領土について何も知らない。」この作文を書くときに、私はそう思いました。社会の授業で習った基本的なことしか知らないのです。これでは作文を書くこともできないと思い、まずは北方領土について調べることから始めました。

調べてみて驚いたこと、気になったことが二つありました。一つ目は日本のロシアに対する考えです。私は日本とロシアは簡単に言ってしまうけんかをしているような状態だと思っていました。しかし外務省のホームページには「北方四島の帰属の問題を解決して平和条約を締結する」という基本方針」という文が書いてあります。北方領土問題の解決の最終目標が平和条約だとは思っていなかったのでも驚きました。日本もロシアとの対立を望んではいないことが伝わってきました。

二つ目は「日本の北方四島についての協力や交流」につ

いてです。外務省のホームページには大まかに四つのことが書いてありました。その中で私が気になったのは「北方四島住民支援」です。この取り組みは日本政府が北方四島在住のロシア人に対して、患者の受け入れや健康診断、北方四島医師看護師等研修などを行っているというものです。北方領土問題解決に向けて話し合いや様々な取り組みが行われているとは思いませんでした。また、その取り組みの中でも、北方四島在住のロシア人に向けたものが行われていることは知りませんでした。そしてこの取り組みは北方四島の方々に高く評価されているようです。

北方領土問題について調べてみて、日本政府のロシアと友好的な関係になりたいという思いが伝わってきました。政府がそのような考えだということは日本全体がそこに向かっていかなければならないと思います。そのためには私たちの世代が動かなければいけません。日本政府の考えをたくさんの人々へ伝えること。それが私たちにできる北方領土問題解決に向けての第一歩だと思っております。

北方領土問題は日本とロシアの政府だけの問題ではないこと。このことを調べていくなかで強く感じました。これからは今回分かったことをたくさんの人に伝え、積極的に北方領土問題に関わっていききたいです。また日本とロシア

が今後どのような関係になっていくのか、常に関心を持っていきたいです。両国の関係が友好的で素晴らしいものになることを願っていききたいです。

入 選

「北方領土」を考える

富山市立眞羽中学校 三年 荒井 星

「北方領土」とは、北海道北東にある、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四つの島々のことです。この四つの島、北方領土は日本固有の領土ですが、戦後七十年を経た今でも、ロシアによる不法占拠が続いています。

日本は七十年前、太平洋戦争をしていました。相手は主にアメリカです。しかし日本が降伏する直前にロシアが日本へ攻め込んできました。

そして様々なもので調べてみたところ、一九五一年、サンフランシスコ平和条約を結んだ時に、日本は千島列島を放棄する、としています。この千島列島を、日本側は北方

領土以北の島々と示しています。ただ、日本はかつて千島列島に北方領土を含めた意味で使ったとされる条件もあり、定義を変えていると批判もされました。しかし、サンフランシスコ平和条約はアメリカなどとは結んだものの、ロシアとは結んでいません。このことから、日本はロシアが北方領土の領有権を主張するのは間違いで、北方領土は日本固有の領土だと主張しているのです。

一方、ロシアは、日本が千島列島を放棄するといい、戦争に勝利した結果、北方領土を得たと主張しているのです。

私は、二つの国が自国の領土を増やしたいという欲をぶつけ合っているから、この問題が解決しないのだと思います。今、北方領土には多くのロシア人が住んでいます。ここで日本が北方領土をロシアから返してもらおうことにより、そのロシア人たちが島から追い出すのでしょうか。この七十年の間に、戦争時代とは全く関係のないロシア人がそこで生まれ、育っています。北方領土の島々が故郷だという人も少なくないと思います。しかし、だからといって返還しなくてもいいというわけではありません。一番良いのは、返還後に日本人とロシア人が協力し合って生活していくことです。

私は「北方領土問題」についてあまり関心がなく、この作文を書くまではロシアが戦後北方領土を不法占拠している、ということ以外、全く知りませんでした。私と同じように、最近は北方領土問題に関心がある人は少ないと感じます。このことは、北方領土返還が長びいている理由の一つでもあると思います。日本国民はもっと北方領土に関心を持ち、返還してほしいという気持ちを積極的に表現していくべきです。そして、一刻も早く「北方領土問題」が解決することを願います。

入 選

理解と信頼のシンボルとして

富山市立三成中学校 三年 西川 輝

「蒼い。」その写真の空は、どこまでも澄み渡っています。清らかな海やそこに棲む多くの生物、広がる自然。街が次々と姿を変える日本人には、どこか懐かしい感じがします。しかし、ここは日本地図に示されていても、日本人

が簡単に入れない、近くて遠い日本。一九四五年八月のポツダム宣言の受諾から一か月足らずで、北方領土が旧ソ連に占領されたことは、世界にとっても驚きのことだったと聞きます。日本人は戻れなくなりました。

では、この北方領土で最も大きな問題は何でしょうか。日本人々が日本の領土に入れないことでしょうか。ロシアの人々が日本の領土を不法に占拠していることでしょうか。それもあるでしょうが、僕は北方領土に住んでいた人々が、未だに故郷に帰れないことだと思います。この問題において最も被害を被っていたのは、当時そこに住んでいた人々なのです。すでに七十年の時が流れ、故郷に帰れないまま亡くなってしまいう現実があります。かつてのように署名活動が盛んに行われたころとは違い、関心が低下した現代の日本では、北方領土問題は今なお深刻です。

では、この問題に対して日本は、どうすればよいのでしょうか。そこで僕は、ある一つの考えに至りました。それは、「北方領土を日露共有の島とすること」です。まず、この考えはロシアの人々と友好的関係を築いていることが前提なので、ロシアの人々とより交流を深めていくことから始まります。例えば、サッカーやスケートなどスポーツを通じた交流や、国際交流パーティー、互いの国へ行ける

ツアーを開くなどするのです。これらのような国境を越えた交流は、互いの考えを理解し、共有することにつながり、信頼を育むことになります。また、一般の人々のつながりが強くなっていくことは、必ずその国々の関係をよくしていきます。そして、交流が十分親密になったあと、より日本とロシアの関係を深めるために、「北方領土を自由に行き来できる交流の場にしよう。」と提案するのです。もともと、そのような関係を築くためには時間が必要となるでしょう。しかし、そうなれば日本人々はごく自然に北方領土に入ることができずし、北方領土はロシアとの結びつきを強めてくれる、国際交流の掛け橋となるでしょう。領土の返還も、その先の交渉として見えてくるのではないのでしょうか。

日本は、北方領土以外にも領土を巡って近隣の国々との問題を抱えています。小さな島によって経済や環境、その他の利害が生まれるからです。だからこそ、今は北方領土という国際的問題を平和的に解決することが大切なのではないでしょうか。そして、他国からの協力を得て、国そのものをよくしていく、これが、今の日本に求められているものではないでしょうか。

七十年目の四島返還

射水市立小杉南中学校 一年 境 公士朗

北方領土。この言葉を聞いて、何を思いうかべるだろうか。ロシアに不法占拠されている日本の領土。とても遠い北にある、小さな島々の集まり。僕はそう思いました。

北海道を訪問した際、僕は飛行機の窓から北方領土を見ようと覗き込んだことがあります。しかし、北方領土は見えません。単純にどこにあるのだろうと疑問に思ったことが、興味をもったきっかけでした。

一九四五年、日本はポツダム宣言を受け入れ降伏。戦争は終わったと誰もがそう思っていた時、突然ソ連が千島列島に上陸したのを始まりに、北方領土へ侵攻しました。日本の領土を守ろうと、戦った日本人はシベリアに抑留され、強制労働を強いられました。残った一万七千もの島民は、ソ連によって追い出されたのです。これが戦後の北方領土の悲劇の歴史です。僕はこれを知った時、今すぐにも武力で占領してしまえばいいと思いました。島民の人々

にとつてはロシアに全てを奪われ、苦しい思いで暮らしておられるのですから。しかし今現在、北方領土が生まれ故郷となっているロシア人がたくさんいることを知ると、非常に複雑な気持ちになりました。武力を使うことは、七十年前の悲劇を繰り返すことになりかねないと思つたからです。

ロシアは過去に何度か交渉の場で、二島の返還について言及したことがあります。歯舞群島と色丹島のことですが、日本は決して妥協はせず、粘り強く四島一括返還を要求してきました。北方領土は、サンフランシスコ講和条約で領有を放棄した千島列島には含まれておらず、地図を見ても明らか通り、北海道に連なる島々です。ロシアの主張としては、北方領土は千島列島にあたるというのですが、そもそも当時のソ連はサンフランシスコ講和条約に調印していません。このように、様々な矛盾があるのが北方領土問題なのです。

僕は、今の日露関係は悪くないと思います。なぜなら、未来志向の会談を何度も行っているし、ロシアにおける対日世論調査では、日本が好きと答えた人の割合が37%で嫌いだと答えた3%を大きく上回る結果が出ているからです。これは、ウクライナ問題で冷え込んでいるように見える首

脳レベルでの日露関係が、国民レベルでは日本を好意的に見ているということを裏付ける調査となりました。

世界は第二次大戦から七十年を迎え、平和の道を歩みつつあります。今年は日本とロシアとの国交が正常化されて五十九周年です。双方が友好的だと考えている今が問題を解決するチャンスであると考えます。島民の人々にとつては、時間はもうありません。これ以上遅らせてはいけません。今こそ、国民一人一人が意識を高め、四島返還を強く強く要求することが、解決への一歩だと思います。

入 選

北方領土問題の解決を

砺波市立庄川中学校 三年 藤森 美奈

私が北方領土問題について考えようと思った訳は、TVのニュースや雑誌などを見て、どうしてロシアは日本の倍以上の領土を持っているのに北方領土を返してくれないのかという疑問をもったからです。

そこで私は、北方領土問題についてインターネットや資料を使い調べてみました。

北方領土問題とは、日本とロシアの間において、戦後半世紀経つのに平和条約が結ばれていない状態のことです。その原因は、日本固有の領土である北方領土をロシアが実効支配しているためです。

北方領土がロシアに占拠された当時、日本とソ連は日ソ中立条約を結んでいました。これをソ連は第二次世界大戦の時に一方的に破棄し日本に攻めてきました。また、日本が負けを認め、降伏の意思をはっきりと表明したあとに、ソ連軍が北方領土に侵攻してきました。この二つのことから、私は日本人として、不正に北方領土を奪われた印象がとても強く、「四島とも返還されるべき」という意見をもっています。

私は北方領土問題について調べてみて、ロシアは、日ソ共同宣言通り歯舞・色丹を返還し、領土問題は終了と言っています。ですが、それに対して日本は、あと二島はいつ返してくれるの？と言っていることが分かりました。二島を返してくれるだけでも私はありがたいことだと思いますが、やはり日本の固有の島、四島全てを返してほしいと欲を張ってしまいます。私は日本人なのでロシアを悪いようにしか

書けません、日本の悪い所もロシアから見るとたくさんあると思います。でも、ロシアは、日本を必要としており、日本も、ロシアを必要としています。だから、私は早くこの北方領土問題を解決して、平和条約を結び、どちらの国も助け合いながら平和な国を作ってくれると信じています。

また、これからはただ政府間や外交だけの問題とするのではなく、自分自身もっと北方領土問題について関心をもっていきたいです。そして、両国の関係が友好的で豊かになるように、戦後七十年経過してもなお解決しないこの問題が解決できるように、私の周りの人に呼びかけて、四島とも日本に返ってくることを祈りたいと思います。

